

## 私たちをとりまく社会の動き

憲法施行60年、2000万人のアジアの人々、300万人の日本国民の失われた命と焦土の中から生まれ、戦争のない平和で公正な世界を希求する憲法を手放すのか、まもり輝かせるのか、いまわたしたちは大きな歴史的な岐路に立たされている。

「5年をめどに改憲する」と宣言した安倍内閣が登場し、改憲を先取りする悪政が次から次へとおしよせている。

「やらせ」と「さくら」を使ってまで強行した教育基本法の改悪、海外派兵を正当化する自衛隊法改悪と防衛庁から防衛省への昇格、労働者を分断し、働く意欲をそぐ「成果主義賃金」や非正規雇用、「ホワイトカラー・エグゼンプション」など無制限のただ働きを強いる労働法制の改悪、史上最高の利益を上げている大企業をさらに優遇し、庶民からは搾り取れるだけ搾り取る税制改悪、公務員攻撃と共にすすめられる利用者無視の「民営化」、「核兵器保有論」の浮上、国民の口を封じる共謀罪などなど、まさに、アメリカと財界のいいなりの国づくり、「戦争できる国」への道をひた走っている。

この政治が生みだす利益最優先、弱肉強食の「格差社会」は、命を軽んじ、働く意欲、生きる意欲をそぎ落とすものとなっている。競争と差別化が持ち込まれた教育現場での「いじめ」、自殺の多発、働いても働いても生活保護基準にも達しない低賃金労働者（ワーキングプア）や「過労死」の急増、重大事故や欠陥製品の多発、金融犯罪や汚職腐敗の増加など、暗い話題のニュースがつきない。そういう中で、文化的な営みをする時間や環境が失われ、孤立した、刹那的で享乐的な文化が人々のところを覆っている。

一方で、このような悪政、社会の動きにたいし、それを許さないと多くの人が声を上げ、たたかいに立ち上がり、共同・連帯の輪は大きな広がりを見せている。

ブッシュ大統領が起こしたイラク戦争への批判は世界の世論となり、アメリカ国民は中間選挙でしっかり審判を下した。アメリカの裏庭と言われていた中南米では「新自由主義経済」による格差と貧困の社会から国民本位の社会への変革がとどまることのない勢いで進んでいる。アジアでも平和的枠組みの中での対話がすすみ、今や超大国といわれたアメリカの覇権主義は破綻している。教育基本法改悪反対の闘いは、「教育を守れ」「子どもたちを守れ」の一致点で組織や立場を越えた広範な人々の共同を広げ、無権利状態の労働者が組合を作り権利を勝ち取る闘いも進んでいる。「九条の会」は全国で5600を越え、党派を超えた国民運動に発展しつつある。

人間の連帯や、命の尊さ、戦争のおろかさを描く映画や音楽、小説が多くの人に支持されているのは、人間らしくいきたい、誇りを持って働きたい、戦争はいやだという思いを多くの国民がもっていることのあらわれでもある。広島の中学生たちの平和への思いから生みだされた歌「ねがい」が世界をつなぎ、日本中にひろがっている。うたごえ喫茶・酒場やうたう会につどう人々は年々増え、メディアも注目する状況が生まれている。

感性を揺り動かし、共感を広げ、連帯をつくりだす音楽・文化・芸術の役割はますます大きくなっている。「うたごえは平和の力」「うたはたたかいとともに」「うたごえは生きる力」をかがげ、60周年を迎える運動の真価を発揮し、「つくり」「ひろめ」「結ぶ」とりくみを意気高くすすめていくことが求められている。